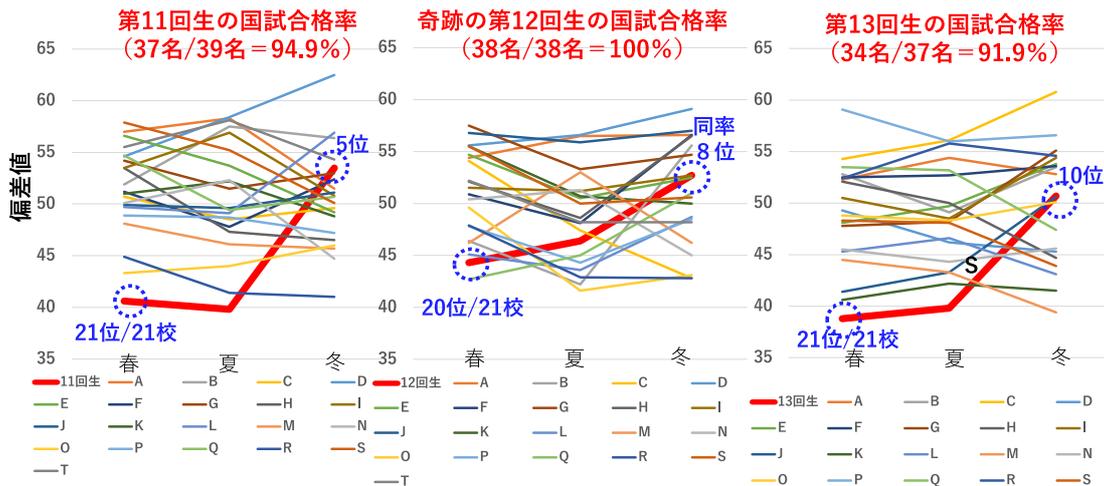


道内看護学校21校の模擬試験偏差値の推移

毎年、専門学校3年生および大学4年生が、看護師国家試験に対する共通模擬試験を年6回受験し、本番に備えます。看護師国家試験では、全受験生の下位10%ほどの成績になると国家試験が不合格となる可能性が高くなってしまいます。

そのため、偏差値としては最低でも45を超えていないと安心はできないのです。

道内看護学校21校の模擬試験偏差値の推移



第11回生～13回生は国試直前で偏差値が50を超え、偏差値が全道の看護系学校で10位以上に入った。

3つのグラフは、ある業者が主催した春、夏、冬の模擬試験の点数を偏差値に置き換え、学校ごとの偏差値（平均点）の推移を重ねたものです。過去3年間のデータから、各校は自校の成績がわかりますが、他校がどの線に対応するかはわからないようになっております。

グラフから明らかなように、多くの学校では4月の時点で偏差値が45以上であるため、そのペースで最後の一年を学び続ければ、ほぼ全員が合格となります。しかし、本校を含め2～3校は4月のままでは国家試験の合格率がとても悪くなり、大多数の学校に大きく水を開けられてしまいます。

本校では、最後の1年間をかけてしっかりと学び続ける教育方法を試行錯誤で整えてきました。その結果、国家試験直前の1月では、全21校の中位あたりまで成績が伸びてきました。

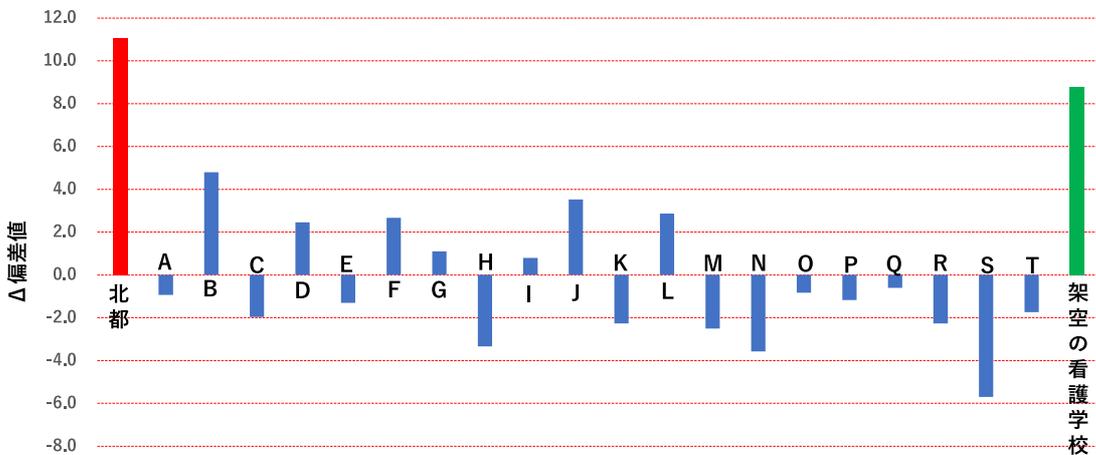
注目すべき点は、本校学生はこの1年を通じて学ぶことが、初めて「努力すれば成績は伸びる」という人生にとっても重要な教訓を、身を以て体験し卒業していることです。さらにいえば、学生全員にそのように実感してもらうため、「教員は皆それぞれの役割をしっかりと果たしながら、学生の学びに貢献する」から、なし遂げられた実績といえます。

全道21校+架空看護学校の成績伸び率の比較

グラフは、過去3年間連続して、本校学生の成績が伸びている状況を示しています。勿論、国立大学ではもともと高校時代から優秀な学生が入学しているので、学生自らが学んでくれます。

そのため、それ以上成績を伸ばす必要がないと考え、教員や学生にはゆとりさえ感じられ、かえって油断することで模擬試験の成績が前回より低下することもあります。尤も成績が低下しても全体の偏差値45以下にならないと考えられます。

全道21校の過去3年間の平均成績伸び率の比較



3年生の1年間の成績伸び率を全道21の看護系大学、短大、専門学校の間で比較した。数値は、過去3年間の平均を示している。緑の架空看護学校は各年度で、本校以外で最も成績の良い学校の数値を平均したものであり、実在しない。赤の本校は安定した指導により偏差値10以上の伸び率を3年間続けて示している。A~Tは他の20校。

しかし、本校ではまさに「お尻に火がついている状態」ですので、これ以上の油断は決して許されないのである。

強い意識と愚直なくらい誠実に学び続けた結果、本校3年生が1年間で伸ばす成績が北海道ではこの3年間ダントツの1位となっているのです（赤のカラム）。緑のカラムは架空の看護学校の結果を示しています。

つまり、各年度で本校以外の学校で成績の伸び率が一番良かった数字を合計し平均したのですが、それでも本校の伸びにはかないません。

勿論、本校の伸び率がトップになったことについては、合格発表後ではどの学校もさほど注目しません。なぜなら、伸びた結果、全道看護系学校での順位がやっと真ん中あたりになっても、そんな学校はザラに存在するという意識しかないからです。

しかし、本校が実施している教育は、どの中学・高校あるいは予備校から見ても「極めて参考になる重要な結果」といえるのではないのでしょうか。本校では、「成績に関しては90%以上が教育環境による」という考えに立脚しており、教育活動を果敢に推進しております。

もう一つ重要な観点があります。それは、昨年度の卒業生のことです。受験した38名

全員が合格したという看護学科では開学以来の初めての偉業を成し遂げた学年であり、私たちは密かに学生達を「奇跡の12回生」と呼んで、敬意を払っております。

実は、学生達の成績を見ると3年生の4月時点で既に偏差値45近くあり、その上で、本校の教育との相乗効果がうまく機能した結果として偉業達成となったと考えられるからです。

実は、何人かの学生がとても積極的に学び、クラス全体を盛り上げてくれたのです。そのようなクラスの学びを進めるファシリテーターとなったのは、実は意欲的な2～3名の社会人であり、それに呼応した複数の学生がグループダイナミクスを高めてくれたのです。このことは、1～2年生の低学年次からクラスの学びを高めるシステム作りに着手すると、「毎年合格率100%を達成できる王国を建設につながる」と考えられるのです。

具体的な方策は幾つか既に考案していますので、今後はその正しさを毎年の結果で証明するのみと考えています。

人口の減少化が進む中でも、医療職を目指す若い方が減っていないことは、北海道の医療を担う視点から極めてありがたいことと思いますが、同時に、そのような希望者をしっかりと育てる本校の役割も着実に果たして行きたいと考えています。